



筑紫女学園大学リポジト

『貧女の吟』考：諷諭詩をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松崎, 治之, MATSUZAKI, Haruyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/733

『貧女の吟』考

—— 諷諭詩をめぐって ——

松 崎 治 之

A Study of A Poem of a Poor Woman

—— A Poem of Allegory ——

Haruyuki MATSUZAKI

一、

日本の上代、七世紀の半ばから一世紀余りのいわゆる萬葉時代は、政治史のうえで急速に古代国家が形成されていく激動期を経て中央集権的律令制の確立する時期でもあるが、これを区分して、第一期は壬申の乱の終結（六七二年）の頃まで、第二期は飛鳥藤原宮を経て平城京遷都（七一〇年）の頃まで、第三期は奈良朝前期、天平五（七三三）年頃まで、第四期は奈良朝中期、天平六（七三四）年以後とするのが通説とされている。要約すると、発生期、確立期、展開期、衰退期といった歌風の変遷を物語るものでもあった。

なかでも、第三期奈良朝前期は歌境が円熟するとともに多様な個性の開花がみられるが、それは奈良の都の整備、学問の進展、政治の世界の明暗を背景としていた。

それが第四期には、和歌が社交の具としての傾向をおびて獨創性と新鮮味を失う中で、優美繊細なものが多く作られた。

ちなみに、大伴家持の歌にみられる憂愁や内省は、政治・社会の行きづまりに直面した一貴族の精神の証しでもあった。

このように萬葉文学は歌風の推移をみせているが、なお、そこには民衆の生活のなかでうたわれた歌謡、東歌、防人歌なども含んでいて文字どおり古代の国民の歌集としての高い価値をもっていた。

その他、上代の文学としては、神を祭る祝詞や天皇の勅を宣布することばの宣命なども忘れがたいが、天平勝宝三（七五二）年に編まれた『懷風藻』は、天智天皇（六六〇年代）の頃からの作品を集めた現存最古の漢詩集で、その詩には、六朝から初唐にかけての中国の影響が強く認められる。

ところで、漢詩文は、古代国家の貴族官人たちの文学であり、公的な正統の文学と意識されていた。そしてそれは、やがて次の時代（中古）の勅撰の漢詩文集へとつながるものであった。

平安京への遷都は、奈良朝末期の政治の混迷を打開し、律令政治を再建しようとする朝廷の方針によるものであったが、そのために積極的に大陸文化の移入が図られ、都城の規模や朝廷の風儀が一途に唐風化した。

はたまた、儒教の抽象的な理論を学ぶよりも、詩や歴史の具体的な内容に学ぶべく、学問の中心が明経道（経書の歴史）から文章道に移った。文章道は紀伝道とも呼ばれ、歴史や文学の研究である。その隆盛が文学と政治を関連づける文章経国の思想を生み出したが、それは畢竟、すぐれた政治家はすぐれた詩人でなければならぬとするものであった。

したがって、この時代（中古の初期）の文学が、漢詩文全盛の様相をもってはじまるのは、必然の帰結でもあった。

とにかく、この中古（平安時代）の初期の宮廷社会は、国風暗黒時代と呼ばれるほど、唐文化一色に塗りつぶされた感がある。特に、嵯峨天皇の弘仁期には、天皇を中心に漢詩文の制作が、晴れの文学として隆盛をきわめた。具体的には、『凌雲集』・『文華秀麗集』・『経国集』という勅撰の漢詩文集が編纂され、また空海の『性靈集』や同じ空海が中国の六朝文学論にもとづいて書いた『文鏡秘府論』など、注目されるものがその証である。

『萬葉集』以後、和歌は、一時公的な世界では影をひそめ、ただ、民間や私の世界でうたわれていたのだが、九世紀の後半になると貴族社会には唐風の規範から抜け出す動きが起こつてきて、和歌はいわゆる六歌仙の時代を経て、宮廷貴族文学として復興してきたのである。そして、そのことは、萬葉仮名をもとにして新たに生み出されてきた仮名文字（ひら仮名）の普及と深くかかわりあうものであった。その仮名文字によって書かれた和歌は、萬葉和歌とは異質で、ウィットに富む趣向や縁語・掛詞かけことばなどの技法による独自の風体を自立させて、漢詩と対等の貴族文学として認められるようになった。やがて十世紀のはじめ（九〇五年）、『古今和歌集』が勅撰され、これが規範となつて勅撰和歌集の伝統が形成されることになるわけである。

以上、上代から中古初期にかけての本朝詩歌の趨勢を概観したが、それにしても残存している王朝詩の寥々たる点は如何ともしがたい。

具現すると、承和期（八三〇年代）は、詩人、歌人として名高い小野篁たかむら、後の貞観期（八四二年頃）、即ち九世紀後半に入ると、大学における紀伝道の優位が確立して、学者即ち詩人という図式が一般的となる。大江音人（八一―八七七）・菅原是善（八二―八八〇）道真の父ちち・都良香（八三四―八七九）・橘広相（八三八―八九〇）・島田忠臣（八二八―八九二）らは、その代表的な詩人である。

なかでも、音人は江家学問の祖とされ、父菅原清公を継いだ是善は学儒として活躍する一方、私邸で「菅家廊下」を主宰し多くの門弟を教育した。

忠臣はその弟子で、道真の家庭教師となっている。ところで、忠臣以外は、まとまった詩作を殆ど残していない。これは古代の詩人達に共通するものだが、これに対して奇蹟的にほぼ編時のままに漢詩文集を伝えている稀有な詩人がいる。それが菅原道真（八四五—九〇三）である。

その『菅家文章』・『菅家後集』には、年代順に生涯にわたる五二〇余首が収められ、かれがどのような時代の中で生き、いかにして詩人としての己を築きあげていったかがうかがえる。

その『菅家文章』の詩を見ると、比喩や故事などを用いて、対象の美を多角的に表現する試みが窺えて、多感にして豊かな詩藻を構築する研鑽の跡をしのばせるものである。

一方、道真は、宇多帝に重用され学儒として、栄達する間でも、時勢に敏感に反応しながら、学者の家の伝統を背負う孤独な詩人としての自我を形象化している。

はたまた、道真には白楽天（中唐・七七二—八四六）の詩の影響もよく説かれてはいるが、実際は白詩の明るさとは対照的に、道真の詩には内面に並ではない深刻さを感じられる。―その内面の深刻さというか、心の陰影が払拭しきれないところが、畢竟するに道真の自我ともいえる。

なかんずく、讚州（香川県）時代の詩を中心とする『菅家文章』の三・四巻は、失意のうちにも自然や人間に対する視点があり、それに己の心情を重ねたり、庶民の生活を活写する作品となっていて、詩境の広がりを見せている。さらに、大宰府謫居後になると、謹慎、忠誠、哀傷の情などを率直に表現し、白楽天の詩を完全に脱したユニークな世界を構築させていると言っても過言ではなからう。

その独自の世界とは、左遷されて、逆境におかれても、天皇を怨むこともなく、かえってその恩に感激して、ひたすら忠誠を尽くして謹慎している様相などがそれである。

ちなみに、「去年ノ今夜清涼二侍シ、秋思ノ詩篇独り断腸、恩賜ノ御衣今此ニ在リ、捧持シテ毎日余香ヲ揮ス」と

いう「九月十日」と題する七絶と、「ひと「夕たぐ比たぐ謫たぐ落たぐセラレテ柴さい蒨しん二に在あリシよ従よリ、万ばん死し兢しやう兢しやうタリき跼よく踏せきノ情じやう……」と詠えいずる「不出門」と題する七律は、それを象徴する典型的なものと思われる。

道真が、詩人として最も高く評価した同時代人は紀長谷雄きのほせお（八四五—九一二）である。

大宰府配流後の詩文を、京の紀長谷雄に送って、編定を依頼したのが、『菅家後集』として、現在残存しているが、それは道真の紀長谷雄に対する信頼を裏付けるものであろう。

だがしかし、文人官僚として栄達の頂点をきわめた道真の大宰府左遷（九〇一年）による挫折は、藤原北家一門、つまり摂関家の政治的圧力による悲劇にもとづくものとしての認識が、殊に紀伝道に立身出世を夢みていた者たちに動揺を与え、心理的に暗い影をおとすこととなった。やがて詩人達は政治の表舞台からは遠ざけられ、詩作や学儒としての狭せまい世界に追われて、不遇をかこつ一方で、詩文をみかくことに一層執着するようになっていった。

そして、こうした当時の漢詩文家の成果が、十四巻の『本朝文粹』として結晶している。

この漢詩文集は、藤原明衡あきひら（九八九？—一〇六六）が康平年間（一一〇五—一一〇六）に編纂。とにかく、十一世紀半ば頃の成立。宋の姚鉉ぎやう（九六八—一〇二〇）の撰になる『唐文粹』（一一〇〇巻）の名称に倣ならったものといわれている。そして嵯峨天皇から後一条天皇時代までの詩文四三〇余編をほぼ『文選』の体裁に依よって部門別に所収したものである。

とりわけ四六駢儷体を用いた当時の実用的な文書の粹は、後人の詩文作成に大いに寄与し、願文・表白・往来物・軍記物・紀行・謡曲など広範に影響している。

その主要な詩文家としては、大江朝綱・江匡衡・菅原文時・菅原道真・紀長谷雄・源順・大江以言・慶滋保胤・兼明親王・紀齊名・都良香・三善清行らがいる。

確かに『本朝文粹』が名称では『唐文粹』に、部立てにおいては『文選』に学んだとされるのは、事実その通り

であろう。だがしかし、『本朝文粹』は、詩に関する限り、律詩、絶句といった今体詩は取りあげないで、むしろ古体詩だけを採録の対象としている。

一方、賦では逆に『文選』に見られる左思の「三都の賦」のような重厚な詩ではなくて、菅三品・源英明などの「織月の賦」、紀納言（長谷雄のこと）の「春雪の賦」など、繊細な叙景の作のみを収めているといった按配である。しいていえば、そこには『白氏文集』の中の賦の投影と推察されるものが多いように思われる。

ここで中古、十世紀の初頭から、十一世紀前半までの約一世紀間の文学史を整理し、要約すると、まず、九〇五年の『古今和歌集』の勅撰は、唐の影響から離れ国風文化の時代を覚醒させた。つまり、漢詩に対する和歌の自覚を深め、平仮名の成立が、その再興を促進もさせた。

具体的には、『竹取物語』をはじめ、伝奇物語が誕生し、さらに日記、随想、説話、歴史物語などつぎつぎに登場して、一つの国風文化の黄金時代を築いたといえる。

その間、漢詩文の方では、十一世紀の初頭、漢詩を吟誦することが、朗詠として貴族の間に流行したが、その証左が一〇一三年頃成立したといわれる藤原公任の『和漢朗詠集』として実を結んでいる。

思うに、藤原氏一族が朝廷の要職を独占する摂関体制の確立が、貴族たちの生活をきわめて情趣的なものにしていったのであろう。

したがって、文学の制作と享受は、もっぱら貴族社会において行われ、男の漢文学とあいまって、宮廷女流文学の時代となった。

こうした趨勢の中で、一〇五八年頃、漢詩文の集大成と思われる、『本朝文粹』^{ほんちょうぶんずい}が、藤原明衡^{あきむら}によって撰進されたのである。

十世紀初頭の『菅家文章』・『菅家後集』、十一世紀初頭から中期にかけての『和漢朗詠集』・『本朝文粹』と漢詩文

集が成立しているが、いずれも国風文化の再興や黄金時代と重なっているが、これは当時の貴族知識人たちの漢字と平仮名による記述の二重性を明示するものでもある。

さて、以上の四書の漢詩文集が、白楽天の『白氏文集』の影響を受けていることは、明白な事実であるが、国風文学の物語、日記、随想などの作品群が、唐代の詩・伝奇小説の作風を享受していることもこれまた自明の理である。

以上のような中古の初期・中期頃の時代背景と文学史の趨勢の中で、今回は、道真が漢詩人として最も高く評価している紀長谷雄（八四五―九一二）の「貧女吟」という諷諭詩と、白楽天の新樂府第四十首「井底引銀瓶」（井底銀瓶ヲ引ク）詩とのかかりについて、検討し、管見を論述したいと思っている。

道真の讚州時代の作品に「路遇白頭翁」（路ニ白頭ノ翁ニ遇フ）という五十二句になる樂府体の詩があるが、これは恐らく白楽天の新樂府五十首中の第九首「新豊折臂翁」（新豊ノ臂ヲ折リシ翁）の詩に誘発されて詩作されたものであろうといわれている。

確かに、作品の体裁、構成、作法など、白詩の模倣であることは一目瞭然である。

しかしながら、肝心な詩趣の面では、白楽天と道真には、歴然たる差異がある。

その要諦は、革命（禪讓放伐）を認める中国と万世一系の天皇の存在にもとづく天皇崇拜をモットーとする日本との違いが、道真の詩では、白詩的な諷諭性を希薄にしているということである。

これは伝統的な国柄、風土、思想などにもとづくもので、如何ともしがたい感があるが、ただ当時の日本の漢詩人が、唐詩や白詩の中でも自然詩、閑適詩、感傷詩には興味関心をもって共感しているのに、『詩経』以来の伝統的な諷諭詩には、関心がないといっても過言ではないムードの中で、道真がその諷諭詩にもチャレンジしている姿勢

には、それなりの意義があると思われる。畢竟、政治に関与した道真の良心の所産であって、おのずと迸った詩情であろう。

ところで、今回の論考である紀長谷雄の「貧女吟」にも、白楽天の新樂府五十首中の第四十首に、「井底引銀瓶」(井底銀瓶ヲ引ク)——止淫奔也(淫奔ヲ止ムルナリ)という似た内容の作品があるが、無論、紀長谷雄も、恐らくこの白楽天の詩に誘発されたものであつたらう。

とはいうものの、道真の前例とは、どこが諷諭詩への挑戦として異なるか、分析し検討を試みようと思つている。

二、

それでは、紀長谷雄プロフィールを概略しておこう。

承和十二(八四五)年から延喜十二(九一二)年までの人であつて、字は寛、唐名は発昭。紀納言あるいは紀家ともいう。彈正忠貞範の子息で、長谷寺に祈つて長谷雄を授かつたという。始め都良香に学を受け、貞観十八(八七六)年に文章生に補せられ、この頃、菅原道真の門に入る。元慶五(八八一)年には文章得業生となり、対策に及第して仁和二(八八六)年に少外記・寛平二(八九〇)年には、図書頭、同三(八九二)年に文章博士となり、式部少輔、右少弁を経て、同七(八九五)年大学頭となり、宇多天皇に『漢書』・『文選』などを進講した。同九(八九七)年に天皇の推薦で新帝醍醐天皇の顧問の一員となり、式部大輔、侍従を兼ねた。

昌泰二(八九九)年、右大弁、翌年左大弁に転じ、延喜二(九〇二)年、参議となり、同十(九一〇)年、権中納言従三位に進み、翌年中納言となり、同十二(九一二)年二月に六十八歳で没した。

詩才に富み、道真亡き後、延喜の文壇の重鎮として三善清行と並称されている。

その家集の『紀家集』は残巻を留めるにすぎず、詩文は『本朝文粹』の外に『扶桑集』・『和漢朗詠集』などに散見される。

かれは雑体の詩と平明な散文を得意とし、その方面での作品を多く見ることができるといえる。

なかでも、ユニークなのは、志怪小説の『紀家怪異実録』、個人伝の『昭宣公』があつたというが、今は散逸して伝わらない。

その他、『今昔物語集』、『江談抄』などに多くの逸聞を残している。

三、

それでは、『本朝文粹』巻一の雑詩編中の古調に見える七言古詩「貧女吟」(貧女ノ吟)を列記して、検討、分析の具にしよう。―四十句の長篇詩であるので、四解に分けて論述する。

(一)、有女有女寡又貧

じょあ じょあ かの じまひん
女有り有女り寡ニシテ又貧

年齒蹉跎病日新

ねんし さいた やまいひ
年齒蹉跎シテ病日ニ新タナリ

紅葉門深行跡斷

こうせうもんふか
紅葉門深クシテ行跡斷工

四壁虚中多苦辛

しへきまじゆう
四壁虚中 苦辛多シ

本是富家鍾愛女

もとこ ふうかじゆうあい
本是レ富家鍾愛ノ女

幽深窓裏養成身

ゆうしんまじゆうせい
幽深窓裏養成ノ身

綺羅脂粉粧無暇

きらしふんよお
綺羅脂粉粧フニ暇無シ

不謝巫山一片雲

ゆず ふざんいつぺん
不謝巫山一片ノ雲

年初十五顔如玉

年初メテ十五 顔 玉ノ如シ

父母常言與貴人

父母常ニ言フ貴人ニ与ヘント

公子王孫競相挑

公子王孫競フテ相挑ミ

月前花下通慇懃

月前花下 慇懃ヲ通ズ

ここに寡婦となり、貧窮に泣く女がいると詠いだされる。そして現況の不孝のようすから、何故そうなったのかという顛末が語られていく。

現状は、年もとり、そのうえ病氣も日一日と重くなっているのに、訪ねる人としてなく、部屋はガランとして、何もなく、身も心も辛いことばかり。

もともとは、富家の家に生まれ、深窓のうちに愛情につつまれて育てられ、綾絹の着物を身にまとい、化粧をこらすのに寸暇もないといった贅沢な生活であった。おのずと、その美しさは、巫山の雲となった神女にも劣らず、十五になったばかりというのに、玉のような美しさ。

親はいつも貴い方に嫁がせるのだといい、それに応じて貴族の子弟もプロポーズをきそいあう始末。
○富裕な家庭の女の転落の構図が、月並な表現で書き出されているが、それでも中国の典拠となる故事が、四カ所的確に引用されていて、漢詩人としての造詣の深さが偲ばれる。

しかも、そこには奇を衒うといったものは見うけられない。
ちなみに、その典故の部分を整理し、説明しておこう。

1、四句目の「四壁虚中……」であるが、これは四方に壁があるだけで、中はガランとしていることで、貧居の例に使われる。典拠は司馬遷の『史記』の司馬相如伝に「家居タダ四壁ノ立ツノミ」と、ある。

2、六句目の「幽深窓裏養成ノ身」であるが、これは、深閨しんけいのうちにて育てられて成人したことである。典拠は白樂天の『長恨歌』に、「楊家二女有リ初メテ長成ス。養成ハレテ深閨ニ在リテ人未ダ識ラズ」と、ある。

3、八句目の「……巫山一片ノ雲」であるが、巫山は四川省巫山県の東にある山である。普通、男女の情交のことを「巫山ノ夢」という。典拠は宋玉の『高唐ノ賦』に、「楚の懷王が、高唐（洞庭湖あたりにあつた高台）に遊び、夢に巫山の神女と通じ、去るに臨んで、神女が、『妾ハ巫山ノ陽、高丘ノ岨ニ有リ、旦ニハ朝雲トナリ、暮ニハ行雨トナラン』と、いった」と、いう故事にもとづいて、男女の情愛をのべるのが、普通となつた。この詩では、その巫山の雲となつた神女の美しさに劣らない女であつたという。

4、十一句の「公子王孫……」であるが、これは貴族の子弟のことをいう。唐・劉希夷の『白頭ヲ悲シム翁ニ代ル』という古詩に「公子王孫芳樹ノ下、清歌妙舞ス落花ノ前」と、あるによつてゐる。

(二) 父母被欺媒介言

許嫁長安一少年

父母ハ媒介ノ言ニ欺カレ

少年無識亦無行

許嫁ス長安ノ一少年

父母敬之如神仙

少年識無ク亦タ行ヒ無キニ

肥馬輕裘與鷹犬

父母ノ之ヲ敬ウコト神仙ノ如シ

毎日羣遊俠客筵

肥馬輕裘ト鷹犬ト

交談扼腕常招飲

毎日群遊ス俠客ノ筵

一日之費數千錢

談ヲ交ヘ腕ヲ扼シ常ニ招飲ス

産業漸傾遊獵裏

一日ノ費工數千錢

産業漸ク傾ク遊獵ノ裏

家資徒竭醉歌前

家資徒^{かしいなす}ラニ竭^つク醉^{すい}歌^かノ前^{まえ}

親^{おや}が口巧^{くちうしや}者^なな仲人^{なかつと}にだまされて、都^{みやこ}の若者^{わかもの}との結婚^{けっこん}を許^{ゆる}した。この若者^{わかもの}、もともと教養^{きやうやう}もなく品行^{へいぎん}も修^{しゆ}まらぬ者^{もの}であつたのに、親^{おや}はこの男^{おとこ}を神^{かみ}か仙人^{せんじん}のように敬^{うやま}つた。

この男^{おとこ}、肥馬^{ひば}にのり上等^{じやうとう}なチョッキを着^きて、鷹^{たか}・犬^{いぬ}を使^{つか}つて狩獵^{しゆりやう}し、ついによくぎに身^みを投^なじて放蕩^{さんだう}三昧^{さんまい}。家産^{かさん}も傾^{かたむ}いて、蓄財^{ちやくざい}も尽^つきた。

○富裕^{ふぎ}な家庭^{けいたい}に育^{そだ}つた女^{むすめ}の零落^{ぜいらく}の原因^{げんいん}は、両親^{りやうしん}が口上^{くちじやう}手^てな仲人^{なかつと}にだまされて、都^{みやこ}の若者^{わかもの}との結婚^{けっこん}を許^{ゆる}可^かしたことにあると明示^{めいし}している。

そして若者^{わかもの}の短所^{たんじゆ}は、「識^{しき}無^なク亦^{また}タ行^{おこな}ヒ無^なキニ」と、きわめて抽象^{ちゆうざう}的な説明^{せうめい}で、現実^{げんじつ}的^{てき}、具象^{ぐしやう}的なこと^{こと}がらや、行^い為^ゐへの眼識^{がんしき}の描写^{めいぎやう}がない。

結婚^{けっこん}後の若者^{わかもの}の遊獵^{ゆりやう}、遊俠^{ゆくぎ}者の仲間^{なかつと}に入り、放蕩^{さんだう}三昧^{さんまい}にあけられて、家産^{かさん}も傾^{かたむ}き、蓄財^{ちやくざい}も尽^つきていったと、その自墮^{じだう}落^{らく}なようすが、観念^{くわんねん}的なものとして終^はつてゐる。

この解^{かい}の典故^{てんき}は、十七句の「肥馬^{ひば}輕裘^{けいきゆう}……」であるが、肥^ひえた馬^ばと輕^{けい}い皮^{かわ}ごろものことである。これは、『論語^{ろんご}』雍也^{おうえい}篇^{へん}に、「赤^{せき}ノ齊^{せい}ニ適^{てい}クヤ、肥馬^{ひば}ニ乘^まリ、輕裘^{けいきゆう}ヲ衣^きル」と、あるによつたものである。

(三)、十餘年來父母亡

十餘^{じゅうよ}年^{ねん}來^{らい} 父^ふ母^ぼモ亡^うセ弟兄^{ていけい}離^り散^{さん}去^き他^た鄉^{きやう}弟兄^{ていけい}モ離^り散^{さん}シテ他^た鄉^{きやう}ニ去^きル聳^{せい}夫^ふ相^{あい}厭^あ不相^ふ顧^こ聳^{せい}夫^ふモ相^{あい}厭^あキテ相^{あい}顧^こミズ一去^{ひと}無^な歸^{かえ}別^{べつ}恨^{こん}長^{なが}一^{ひと}タビ去^きツテ歸^{かえ}ル無^なク別^{べつ}恨^{こん}長^{なが}シ

日往月來家計盡
飢寒空送幾風霜

日往ひゆ月來つきたり家計かけい尽つキ
飢寒きかん空むなシク送おくル幾風霜いくふうそう

その後、十余年を経て、両親も亡くなり、兄弟も離れ離れに、他郷に去って行った。

夫は嫌気がさして、妻を顧みもしない。ついに夫は家去って行方も知れず、この恨みは永久に尽きはすまい。空しく月日のみを送り、家計もつきて、飢えと寒さに、幾星霜を送ったことか。

○両親は亡くなり、兄弟も離れてゆき、夫も見限つてとび出して行く、この畳み掛けるような不運では、妻の恨みも尽きることにはなからう。

この解の典故は、二十七句の「日往月來……」であるが、これは月日がかかるがわる移ることである。「周易」繫辭下伝に、「日往ケバ則チ月來り、月往ケバ則チ日來ル」と、あるによる。

四、秋風暮雨斷腸晨

憶古懷今淚濕巾

秋風暮雨 斷腸ノ晨
いにしえ おも 今に 涙 巾に 濡す

形似死灰心未死

形ハ死灰ニ似テ心ハ未ダ死セズ

含怨難追舊日春

怨ミラ含メドモ追ヒ難シ旧日ノ春

單居抱影何所在

単居影ヲ抱ク何ノ在ル所ゾ

滿鬢飛蓬滿面塵

滿鬢ノ飛蓬滿面ノ塵

落落戶庭人不見

落落タル戶庭人見エズ

欲披悲緒遂無因

悲緒ヲ披カント欲スレドモ遂ニ因無し

寄語世間豪貴女

語ヲ寄ス、世間豪貴ノ女

擇夫看意莫見人

夫ヲ択ババ意ヲ看ヨ人ヲ見ル莫カレ

又寄世間女父母

又寄ス世間ノ女ノ父母

願以此言書諸紳

願ハクバ此ノ言ヲ以テ諸ヲ紳ニ書セヨ

秋風や夕暮れの雨に、悲しみがいよいよつのる時、おのずと、昔を思い今の境遇を考えては、涙でハンカチをぬらすばかり、身は冷えきった灰のようでも、心はまだ死にきれず、怨んでも、もはや昔の春を取りもどすことはできぬ。

ひりと住まいで、我と我が影を抱くだけのわびしさ。鬢も髪も乱れた飛蓬のようで、顔は塵だらけ。

部屋も庭も閑散として、人影もない。

この悲しい思いを訴えようとしても、手立てもない。

そこで世間の富貴な家庭の女性に申し上げるが、夫を択ぶには、その心を見なさい、決してその外形に迷わされてはなりません。

さらに、世の娘を持つ親に申し上げるが、どうか私のこの言葉を忘れないように、帯のたれている部分に書きとめておいて下さい。

典故は、1、三十一句の「死灰」であるが、これはもえつきて冷たくなった灰のことである。ここでは、女の身体が冷えきった灰のようであるという。これは『莊子』齊物論篇の語による。

2、三十四句の「飛蓬」は、よもぎの飛び乱れるように、髪を乱れたのをいうが、これは『詩経』衛風伯兮篇に、「伯ノ東セシヨリ、首ハ飛蓬ノ如シ」とあるのによる。

3、三十五句の「落落」は、寂しいさまであって、左思の『詠史』詩に、「落落タル窮巷ノ士、影ヲ抱イテ空廬ヲ守ル」と、あるのによる。

4、四十句の「書諸紳」の「紳」は大帯の結んで垂れたところであるが、紳に書すのは備忘のためである。これは『論語』衛靈公篇に、「子張、コレヲ紳ニ書ス」と、あるのによる。

○この最後の解は、明らかに世の親、子女を戒める意味で作ったものと思われる。それを立証するものが、

「語ヲ寄ス、世間豪貴ノ女、

夫ヲ扱ババ意ヲ看ヨ、人ヲ見ル莫カレ、

又寄ス 世間ノ女ノ父母

願ハクハ此ノ言ヲ以テ諸ヲ紳ニ書セヨ」と、いうエピローグの四句であるが、これは諷諭詩の場合、常套手段

ともいえる教戒のことばによる結語である。

畢竟、この四十句になる紀長谷雄の長篇の詩は、裕福な家に生まれながら、不識無行の不埒な男に嫁いだばかりに、生涯貧窮に泣く女のなげきの訴えである。

実説かどうかかわからないが、とにかく親が仲人口にだまされて、結婚を許したのが、そもその原因であるという。

儒教のモラルによる当時の厳格な親子関係の中で、親の眼識のなさが、娘の不幸を生んだという経緯であるが、恐らく類似のことが、身近にあったのであろう。然も有りなんという感慨である。

それにしても、紀長谷雄が、白楽天の新楽府に見られる諷諭詩の体裁とその精神（詩趣）に、一歩近づけた具体的な詩として評価すべきと思われる。

それでは、「貧女ノ吟」と似た内容の作品として、白樂天の新樂府第四十首の「井底引銀瓶（井底銀瓶ヲ引ク）」――止淫奔也（淫奔ヲ止ムルナリ）――があげられるが、この詩は、三十四句からなる樂府体の詩である。

題目の「井底銀瓶ヲ引ク」とは、井戸の底から銀の釣瓶を引き上げることを用いる。「瓶」は、釣瓶のことでもと、なわやさおをつけて井戸の水をくみ上げる桶のことである。

またサブタイトルとして、「淫奔ヲ止ムルナリ」と、あるのは、みだらな結婚を戒め、やめさせようとして作った詩ということである。

井底引銀瓶

井底銀瓶ヲ引く

銀瓶欲上絲繩絶

銀瓶上ラント欲シテ糸繩絶エ

石上磨玉簪

石上玉簪ヲ磨ク

玉簪欲成中央折

玉簪成ラント欲シテ中央ヨリ折ル

瓶沈簪折知奈何

瓶沈ミ簪折ル知ンヌ奈何セン

以妾今朝與君別

妾ガ今朝君ト別ルルニ似タリ

憶昔在家爲女時

憶フ昔家ニ在リテ女爲リシ時

人言舉動有殊姿

人ハ言フ挙動殊姿有リト

嬋娟兩鬢秋蟬翼

嬋娟タル兩鬢ハ秋蟬ノ翼

宛轉雙蛾遠山色

宛轉タル双蛾ハ遠山ノ色

笑隨戲伴後園中
此時與君未相識
妾弄青梅憑短牆
君騎白馬傍垂楊
牆頭馬上遙相顧
一見知君即斷腸
知君斷腸共君語
君指南山松柏樹
感君松柏化爲心
暗合雙鬢逐君去
到君家舍五六年
君家大人頗有言
聘則爲妻奔是妾
不堪主祀奉蘋蘩
終知君家不可住
其奈出門無去處
豈無父母在高堂
亦有情親滿故鄉
潛來更不通消息

わらッテ戲伴ニ随フ後園ノ中
此ノ時君ト未ダ相識ラズ
妾ハ青梅ヲ弄ンデ短牆ニ憑リ
君ハ白馬ニ騎リテ垂楊ニ傍フ
牆頭馬上遙カニ相顧リミル
一見君ガ即チ腸ヲ断ツヲ知ル
君ガ腸ヲ断ツヲ知リテ君ト共ニ語ル
君ハ指サス南山ノ松柏樹
君ガ松柏ヲ化シテ心ト爲スニ感ジ
暗ニ双鬢ヲ合セテ君ヲ逐ヒテ去ル
君ガ家ニ到ツテ舍スルコト五六年
君ガ家ノ大人頗ニ言フ有リ
聘スレバ則チ妻爲リ奔レバ是レ妾
祀リヲ主ドリテ蘋蘩ヲ奉ズルニ堪ヘズト
終ニ君ガ家ノ住ル可カラザルヲ知ルモ
其レ門ヲ出ツレバ去ク処無キヲ奈セン
豈ニ父母ノ高堂ニ在ル無カラシヤ
亦タ情親ノ故郷ニ滿ツル有リ
潜ニ来リシヨリ更ニ消息ヲ通ゼズ

今日悲羞歸不得

今日悲羞スレドモ帰り得ズ

爲君一日恩

君ガ一日ノ恩ノ爲ニ

悞妾百年身

妾ガ百年ノ身ヲ悞ル

寄言癡小人家女

言ヲ寄ス痴小ナル人家ノ女ニ

慎勿將身輕許人

慎シミテ身ヲ將テ輕シク人ニ許スコト勿カレ

詩は、正式な礼によらず、みだらな自由結婚をした女の、如何ともしがたい零落の現況が、

「井底銀瓶ヲ引く」

銀瓶上ガラント欲シテ糸繩絶エ

石上 玉簪ヲ磨ク

玉簪成ラント欲シテ中央ヨリ折ル

瓶沈ミ簪折ル知ンヌ奈何セン」と。

奇抜な比喻で、そのプロローグが、詠い出されているが、そのあとは、終始一貫、女のモノローグ（独白）で、馴れ初めからの事の顛末が語られていく。

井戸の底から銀の瓶を引きあげようとして、あがりかけたところで、縄がぶつり切れてしまった。

また、石の上で玉の簪をみかいていて、出来あがりかけたところで、まん中から折れてしまった。

この瓶は沈み、簪が折れたのは、どうするすべもないが、それはまるで、今日あなたと別れるわたしの身の上そっくりである。

昔、家に居た生娘の時代、立ち居振る舞いがすぐれて美しいと世間の人々からほめられたものでした。

左右の鬢は、秋の蟬の羽のように美しく、対の眉は、まるで遠山の色かと思ましがえるほどでした。

その妾は、笑いこけながら友達と奥の庭で遊んでいたのですが、その頃は、まだあなたとは知り合いではなかったのです。

ある日、妾が青い梅をもてあそびながら低い垣根にもたれてみると、あなたは白馬にのって、しだれ柳のそばまでこられました。さて、垣根のほとりの妾と、馬の上のあなたとが、はるかに目があうと、一目であなたが、妾に思いをかけておられるのがわかりました。そこで妾は、あなたとお話をする、あなたは南山の松や柏を指差して、松柏の常緑のように、心の変ることのないことを約束されました。

その松や柏をわが心とお誓い下さったあなたの心に動かされて、妾は人知れず、わけを一つに結びあげ、あなたを慕ってやって来たのです。こうして、あなたの家に身を寄せること五・六年になりますが、あなたのご両親はしきりに言われます。「――」結納をおさめ、礼をつくして迎えたものなら妻にもできるが、かかってに奔って来て来た女などは、妾である。妾には、先祖の祭りを差配して、供え物をさせたりはできない」と。

もうあなたの家にとどまっておれないことがわかったが、門を出ても行くところのないのをどうしたらよいものでありましょう。

古里の表座敷には、両親がいけないわけではなく、故郷には親戚・縁者もたくさんいます。しかしながら、そつとぬけ出して来て以来、全く便りもしておらず、今となつては悲しいやら、はずかしいやらで帰つても行けません。考えてみると、あなたのため一日のお情けのために、妾は一生を誤ってしまったのです。

そこで世間知らずの若い娘さんたちに、ご忠告申します。用心して軽率に男に身を任せるようなこと、ゆめゆめなさらぬように。

思うに、この白楽天の新樂府の詩は、サブ・タイトルでいう「淫奔ヲ止ムルナリ」という趣旨そのもので、正式な結婚をしないで、私通することを訓戒したものであることは明らかである。一般に「淫奔」の「淫」は、男の好色をいい、「奔」は、女が家出をして男のところへ走るのをいうのである。——したがって、この詩は女のモノローグで展開している点を勘案すると、自戒の気持で書かれたものであろう。

『詩経』の大車の序に、「礼儀陵遲（衰えること）シテ、男女淫奔ス」と、あるが、白楽天（七七二—八四六）の中唐時代は、この作品のように私通（自由恋愛・自由結婚など）が、頻繁に行なわれていたらしく、元稹（七七九—八三一）の傳奇小説『鶯鶯伝』（別名「会真記」）などはこうした時代の風潮を反映したティピカルなものである。

だがしかし、この白楽天の新樂府も元稹の『鶯鶯伝』の場合も、成就できなかった恋愛・結婚に対するヒロインの態度は、毅然としたもので、いずれも自責の念にかられながらも、そこには個（ひとり女）の自覚をみることが出来る。

ちなみに、その点を具現すると、元稹の『鶯鶯伝』では、すでに見限つていながら、男の張生が、女の崔に未練がましく会いに来たのに対して、女はどうしても会わなくて、一篇の詩を送り、きっぱりと別れを告げている。それはこうである。

棄テ置カレテ、今何ヲカ道ハン、（見すてられた今になって、何を申しましょう）

当リシ時、且ク自ヲ親シメリ、（あの時は、私の方からしかけた恋なのですから）

還タ旧時ノ意ヲ將チテ、（いま、あの時、私にして下さった心で、）

憐ミテ眼前ノ人ヲ取ラン（おそばにいるお方を、いつくしんで下さい。）

私通で不埒な恋愛の世界であっても、ヒロイン（女）の姿勢は、個の自覚にもとづいた判断で、見事といわざる

を得ない。

一方、この白楽天の「井底銀瓶ヲ引く」ということばは、古来、男女の離別に用いられていた。たとえば齊の積宝月の『估客樂』では、「瓶ノ井ニ落ツルヲ作ス莫カレ、一タビ去ラバ消息無カラン」と、いうのがそれである。これまた、男の親がかつてに奔りこんだ女は妾だ。そんな女にご先祖のお祭りなどは、させられないと言われ、男の家では一緒に住めないと悟った。とはいうものの、自らとびだして以来、古里には使もしていないので、今となつては悲しいやらはすかしいやらで、帰りたくても帰れない。

当然といえば、それまでであるが、そこには、きわめて理性的な思慮と分別が見られる。それが個(ひとりの女)の自覚の証である。

そして悔恨の情の産物が、「君が一日ノ恩ノ為ニ、妾ガ百年ノ身を悞ル」(あなたのためたつた一日のお情けのために、わたしは一生をだいなしにしてしまった)と、いう自省である。

最後に、「言ヲ寄ス痴小ナル人家ノ女ニ、慎シミテ身ヲ將テ輕シク人ニ許スコト勿カレ」を、エピローグの結句にしているが、これが作者(白楽天)の主意で、世間知らずの小娘に対して、可愛がつてくれたからといって、うっかり男に身を任せると、「百年ノ身ヲ悞ル」ことになる。だから慎めというのである。無論、サブ・タイトルの「淫奔ヲ止ムルナリ」とは、これを言ったものである。

畢竟するに、元・白いづれの作品でも、自から招いた不遇者としてのヒロインの告白は、自縄自縛に対する自責の念を前提にしたうえでのものであるだけに、憂愁の色も感じさせぬほどで、むしろそこには、意気軒昂な姿勢さえ見られる。

こうした気力に富むヒロインの登場は、ひとえに、元稹・白楽天の時代の先駆者的な見識が生みだしたものであろう。

はたまた、元・白が生存していた中唐（八世紀半ばから九世紀半ば頃）は『安史の乱』後の衰退期でもあつて、礼楽を重んじる儒教の精神が随落して、自由恋愛・結婚のムードも身近かにかいまみられるといった時代の俗臭があつたことは、過言ではなからう。

さらに、伝奇小説『鶯鶯伝』は、元稹の若き日の自叙伝ではないかという説さえあるが、だとすれば、結果的に棄婦となつた恋愛の相手（崔氏）に対する憐憫の情が、創作の世界では、自負と思慮分別のある時代を先駆けるヒロインとしての人間像に仕組まれたのであらうという穿つた見解も生じる。

それでは、日本の紀長谷雄（八五一―九一二）の四十句からなる七言古詩『貧女吟』（貧女ノ吟）の場合は、如何なる展開の詩であると、理解すべきであらうか。

五、

『貧女吟』の「吟」は、漢詩の一体。樂府の題の最後に付される「行」、「曲」、「歌」などと同種のもので、『梁父吟』（人が死んで梁甫山に葬られるのを歌つた古歌。古来、三国・蜀の諸葛孔明が、これをこのんで歌つたという）が、「吟」のつく題としては、有名である。

したがつて、「吟」とは、声に調子をつけて「うたう」意という。だとすれば、『貧女吟』は、「貧女の歌」ということになる。要するに、「貧窮に泣く女の歌」のことである。

総体的な印象としては、諷諭詩としての体裁も一応ととのつていて、白樂天の新樂府「井底銀瓶ヲ引ク」のような迫力はないが、わが国の詩人の詩では、成功したものといえよう。

当時の漢詩人、島田忠臣・菅原道真にその詩文の才を認められ、道真からは「元・白ノ再生ト雖モ何ヲ以テ焉ニ

加ヘン」と、評価されているが、当を得たものであろう。

作法として、女の淪落の現況から説きあかされて、何故そのような悲劇的な結末になったのか。過去へとさかのぼっての説法となっているが、これはこういう叙事詩の場合、常套手段でもある。

ただ、白楽天の新樂府との差異は、ストーリーの展開が、ヒロインのモノローグ形式ではなくて、作者の説明体の様式である。

したがって、その表現法の点で、おのずと、臨場感や躍動感が希薄になっている。

当時（上代から中古初期）のわが国の普遍的な家族（子は親に従順である関係）というか、家の仕組というか、こうしたものであったのだろうか。

それにしても、端的に言えば、作品の中でヒロインの主張や行為というか、つまり、積極的な主体性が見受けられないのが、白楽天の新樂府とは明らかに異質である。

表現された内容に対する予想や願望は、ナンセンスなものであるが、仲人口にだまされる蓋然性は、度合いの差はあるとしても、ありうることであるが、この場合、都（都會）の若者のムードに惑わされた親及び女のインフェオリティアイコンプレックス（劣等感）の心理も時代色として多分に考えられよう。

教戒の主意は、「夫ヲ扱ババ意ヲ看ヨ、人ヲ見ル莫カレ」と、いうことであるが、これはいつの時代でもいえる箴言であろう。

とにかく、親に従順な親子関係の中で、親の見そこないによって、奈落の底で悲痛にあえぐ女の生きざまであるが、そこには沈淪に身をまかせただけの人間像があるだけで、ヒロインの主張や個性が見えてこない。とすれば、これは漢詩による貧窮問答歌のパタンであって、その集約として、「世の中を、厭しとやさしと、思へども飛び立ちかねつ、鳥にしあらねば」と、歌たわれているように、まさに、泣き寝入りの、帰結の叙事詩といえよう。

勿論、作者としては、こうした家、風俗、個性、環境、時代性等を包含したもののへの教戒、諷諭の意味合いをこめたものであろうが。

したがって、こうしたカタストロフィー（悲劇的な結末）の叙事詩が、わが国の上代・中古初期の文学（詩・歌）では、おそらく普通の産物であったように思われてならぬ。

最後に、白楽天の新樂府「井底銀瓶ヲ引ク」と、紀長谷雄の古詩「貧女ノ吟」で、ヒロインの姿勢（事に対してとる態度）を最も明示している詩句をあげて、比較検討の結びとしよう。

前者、白楽天のヒロインには、自己の淫奔な行為に対しての自省を前提にした個（ひとりの人間）の自覚があつて、毅然とした態度と言葉が、印象深い、その証としては、愛した男に対しても、

君ガ一日ノ恩ノ為ニ
妾ガ百年ノ身ヲ悞ル

と、いう金句をなげかけていることである。

ところが、後者、「貧女ノ吟」の女には、孤独と悲痛の説明や描写はあつても、自省、自戒のことばも希薄である。そこには奈落の底で嘆く女がいるだけである。具現すると、こうである。

飢寒 空シク送ル幾風霜

秋風 暮雨 断腸ノ晨

古ヲ憶ヒ今ヲ懐ヒテ涙巾ヲ濕ス

形ハ死灰ニ似テ 心ハ未ダ死セズ

怨ミヲ含メドモ追ヒ難シ旧日ノ春

单居 影ヲ抱ク 何ノ在ル所ソ

満鬢ノ飛蓬 満面ノ塵
落落タル戸庭 人見エズ
悲緒ヲ披カント 欲スレドモ遂ニ因無し

人生の悲哀を醸すティピカルな語句、「空シク送ル幾風霜」、「秋風 暮雨」、「旧日ノ春」、「落落タル戸庭」等を媒介として、女の外見と心情が、これまた常套語である「断腸ノ晨」、「涙巾ヲ湿ス」、「怨ミヲ含メドモ追ヒ難シ」、「影ヲ抱ク」、「満鬢ノ飛蓬」、「満面ノ塵」等といった情趣的な語句が、羅列されているのみで、孤独、悲傷の心理は推察されるが、そこには女の具体的な主観や主張がない。

いずれにしても、「貧女ノ吟」は、白楽天の新樂府「井底銀瓶ヲ引ク」に似た諷諭詩ではあるが、中国とわが国の歴史、思想、風土、年代、生活実態の差異が、詩趣に、明暗のコントラストを感じさせるものである。

六、

思うに、白楽天の詩が、十一世紀以後、ますます日本文学の発展に寄与したことは事実である。

二・三その具体例をあげると、こうである。

まず、『和漢朗詠集』（卷下・雑・妓女）に、この「井底銀瓶ヲ引ク」中の対句、

○嬋娟兩鬢秋蟬翼 嬋娟タル兩鬢ハ秋蟬ノ翼
宛轉雙蛾遠山色 宛轉タル双蛾ハ遠山ノ色

が収められている。言うまでもなく、女の美を詠じたものとしてである。

それが『源平盛衰記』（巻二・清盛息女の事）では、

○「七には安芸の敵島の内侍が腹の娘なり。さしたる才芸はなかりけれども、美貌は人に勝れ給へり。嬋娟たる両鬢は秋の蟬の翼、宛転たる双蛾は遠山の色とぞ見紛ふ。秋の夜月を待ち、はつかに山を出づる清光を見るが如し」と、あるが、それである。

ところが、この新樂府の詩で、わが国の人々の共感をよんだのは、「君が一日ノ恩ノ為ニ、妾ガ百年ノ身ヲ悞ル」ということにあつたようである。

これについての明白なものは、こうである。

『平家物語』巻六、葵前では、

「この手習を、冷泉少将隆房御心知りの人にて、これを取つて、件の葵の前に賜はせければ、かほうちあかめ、例ならぬ心地出できたりとて、里へ帰り、うち臥す事五六日して、つひにはかなくなりけり。君が一日の恩のために、妾が百年の身を滅ぼすとも、かやうの事をや申すべき」と、ある。

『源平盛衰記』巻二十五、此君賢聖并紅葉山葵宿弥では、「煩ふ事三十余日ありて彼の歌を胸にあてて、終に墓なく身まかりにけり。主人被三閨召て御涙にむせばせ給ひけり。為三君一日之恩一、誤ニ妾百年之身一、寄レ言 痴 人家娘、慎勿ニ将レ身輕許レ人と誠めたり」と、ある。

『太平記』巻四、笠置囚人死罪流刑事 付藤房卿事では、「此女房立帰り、形見の髪と歌とを見て、読ては泣、泣ては読み、千度百廻巻き返せ共、心乱れてせん方もなし。……先の歌に二首書副て、形見の髪を袖に入、大井川の深き淵に身を投げるこそ哀なれ。為三君一日恩一、誤ニ妾百年身一とも、加様の事をや申べき」と、ある。

以上、「君が一日ノ恩ノ為ニ、妾ガ百年ノ身ヲ悞ル」の投影の実情は、『平家物語』、『源平盛衰記』、『太平記』などでは、概ね恋や愛の果ての死の例として、引用されているが、それは日本の受容で、いずれもあわれをさそう情趣的なものへの傾斜が濃厚である。

一方、中古の中期（二〇一〇年代）に成立したといわれている『和漢朗詠集』（藤原公任編）の存在も大きい。具体的には、五八八首の漢詩句と、二一六首の和歌を収めたものであるが、漢詩は白楽天のものが圧倒的に多く、和歌は紀貫之や凡河内躬恒のものが多い。そしてこれは、詩歌の詠作の軌範として広く流布したものである。したがって、十四世紀後半（一三七一一年頃）成立といわれている『太平記』あたりまで、白楽天の詩がわが国の文学界に多く引用され、その詩想までが影響を与えていることは明らかである。

特に『和漢朗詠集』にある対句の詩が、軌範として模倣され引用されていることから勘案するに、必然的に白詩崇拜のムードが強化されていったと推察される。

その『和漢朗詠集』にある白詩の対句は、「閑適詩」、「感傷詩」、「雑律詩」などのものが多い。ちなみに、すでに人口に膾炙した著名なものをあげると、こうである。

(一)、「香炉峰下、新夕ニ山居ヲトシ、草堂初メテ成リ、偶々東壁ニ題ス」の三、四句がそれである。

遺愛寺鐘欲枕聴	遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欲テテ聴キ
香炉峰雪撥簾看	香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテテ看ル

この「香炉峰の雪」をふまえた清少納言の機転が、中宮定子を満足させた話は『枕草子』の二八二段に記載されている。同じこの二句は左遷された菅原道真の漢詩「不出門」（門ヲ出デズ）に影響を与えていて、それは『大鏡』の一節にも紹介されている。

(二)、「八月十五夜禁中ニ独り直シ、月ニ対シテ元九ヲ憶フ」の三、四句がそれである。

三五夜中新月色 三五夜中 新月ノ色

二千里外故人心 二千里外 故人ノ心

遠方に左遷された友人の元積をしのぶ七律である。一見、技巧をこらさない、さらりとした表現のように感じられるが、目に見える風物と、心の思いとをたくみに対応させた名句である。とにかく、『源氏物語』の「須磨」の巻、『東関紀行』、『続千載和歌集』の藤原俊成の歌、謡曲の「三井寺」・「小督」、『平家物語』、『増鏡』、『徒然草』などにも引用されており、日本文学に多大な影響を与えている。

(三)、「王十八ノ帰山スルヲ送りテ仙遊寺ニ寄題ス」の五、六句が、またそれである。

林間煖酒焼紅葉 林間ニ酒ヲ煖メテ紅葉ヲ焼キ

石上題詩掃緑苔 石上ニ詩ヲ題シテ緑苔ヲ掃フ

酒を暖めて飲むために紅葉を燃やし、詩を書きつけるために石の上をおおっている緑色のコケを払いのけるとは、まことに、風流なしぐさである。ところが、読みかたが、共に順序が反対になっている点も、ユニークである。この対句は、『平家物語』巻六にも引かれているが、『皇朝史略』には、高倉帝と、その召し使いとの話として引用されている。しかも、召し使いまでがこの二句を知っていて、風流心を持っていた、というエピソードが有名である。

ここで白詩のことを総括すると、一わが国、中古（平安時代）の人々の熱烈な傾倒は、何に由来するかということになるが、それは端的に言えば、かれの詩想にあると思われる。

それを立証するのが、新樂府の序で、

- 「(1) 表現に飾りけがなくまっすぐ直接的であるのは、この詩を見る者の分かりやすいことを願ってである。
(2) 用語が率直でびつたりとしているのは、この詩を聞いた人がいましめとするのを願ってである。
(3) その事柄が確かであろうそがないのは、この詩を採集する人に信実を伝えさせたためである」と、いうが、これらが魅了する所以であろう。

勿論、こうした詩風は白詩全体に一貫したものである。

ところでこうした努力が、意識的に試作されたのが新楽府中（「新豊折臂翁」、「井底引銀瓶」など）の詩である。とすればわが国の人々が、親しみやすくなりやすかつ思ったはずである。

思うにすでに『文選』や『遊仙窟』などになじんだ眼からすれば、登場人物のヒーロー・ヒロインが語りかける形式を用いて詠ずる諷諭詩には、また、シンプルで新奇なものがあつたろう。

その証左として、『新楽府』中の第七首「上陽白髮人」・第三十六首「李夫人」・第三十七首「陵園妾」などの詩句が、『源氏物語』の各巻に翻訳されて使用されているのが、散見される。

ちなみに「上陽ノ白髮人」中の、

耿耿殘燈背壁影 耿耿タル殘燈壁ニ背ケタル影

蕭蕭暗雨打窗聲 蕭蕭タル暗雨窓ヲ打ツ声

これが、「帚木」で、「火ほのかに壁に背け」となり、「幻」では、「窓うつ声などめづらしからぬふること」と、なっている。

「李夫人」中の、「人非木石皆有情（人木石ニ非ズ皆情有リ）」これが、「蜻蛉」で、「人木石にあらざれば、みな情あり」と、なっている。「陵園ノ妾」中の、

松門到曉月徘徊 松門曉ニ到ルマデ月徘徊シ

栢城盡日風蕭瑟

栢城^{はくじょう}尽^{じん}日^{じつ}風^{ふう}蕭^{せう}瑟^{せき}タリ

これが「手習」では、「松門に暁いたりて月徘徊すひねもすに吹く風の音もいと心細きに」と、なっている。

さて、こうした影響のことを勘案すると、「井底銀瓶ヲ引ク」が、紀長谷雄の「貧女ノ吟」を、誘発したのではという憶測も、単なる憶測ではないと考えるべきであろう。

さらには、菅原道真の「路ニ白頭翁ニ遇フ」が、白楽天の「新豊ノ臂を折りシ翁」に誘発されて書かれたことを考えるとき、白楽天の「新樂府」は、わが国では諷諭詩としてより、むしろその叙事詩としての展開、言いかえりと、物語的なストーリーや、その哀れを催す感傷のゆえに多大の関心が払われ、しかも富豪の女や宮女のそれを詠じたものに、とりわけ興味関心が持たれていったように思われる。

わが国で諷諭という趣向が明確に意識されたものとしては、『源氏物語』で、帚木の巻の「雨夜の品定め」の条が、白楽天の『秦中吟』（諷諭詩）の第一首「議婚」（婚ヲ議ス）を学んで論議しているのをはじめ、『長恨歌』の影響が大きい「桐壺」の巻に、「人の朝の例まで引き出でつつささめき歎きけり」と、あるのが后妃溺愛の幣を戒めんとしていることなどが、それを証すものであろう。

上代より中古に到るわが国の和漢の文学の展開を眺めてきたが、少なくとも中古（平安時代）の中期には、白楽天の諷諭詩によって、諷諭という境地が開かれたことだけは明言できよう。

そうして、その上限に菅原道真の「路ニ白頭翁ニ遇フ」と、紀長谷雄の「貧女ノ吟」が存在する。

無論、いずれも白楽天の新樂府を軌範としたもので、諷諭詩への試作の精進は並のものではなかったであろう。その中で、道真の表現様式は、「新豊ノ臂を折りシ翁」と同じ問答体でありながら、エピソードの主意が白詩的ではなくて、龍頭蛇尾といった結末の感があるが、これは諷諭詩に対する理解度が不十分だったのでなく、道真

が意識的にした独自の主張であったと思われる。

一方、紀長谷雄の場合は、道真のような白詩にならった問答体の表現法ではなくて、単調な作者の説明様式で、ヒロインの悲劇が語られ、エピソードでも「井底銀瓶ヲ引ク」詩のように、世の富豪の家の女と、その親達に対する教戒の詩句で結ばれていて、体裁は新樂府の軌範に忠実である。

したがって、最後に、この中古初期の二人の諷諭詩の試作は、当時の漢詩文に対する、わが国の学者、詩文家達の強烈な意気ごみの象徴であり、その証といいたい。

(平成十五年十月十日・脱稿)

〔参考資料〕

本稿を草するにあたって、次の資料を参照し引用した。

- 1、新編日本古典文学全集19『和漢朗詠集』校注・訳菅野禮行（小学館）
- 2、新日本古典文学大系27『本朝文粹』大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注（岩波書店刊行）
- 3、唐・白居易著朱金城箋校『白居易集箋校』（上海古籍出版社）
- 4、佐久節訳註『白楽天全詩集』（日本図書センター）
- 5、村上哲見著『漢詩と日本人』（講談社選書メチエ33）
- 6、日本古典文学大系72『菅家文草・菅家後集』川口久雄校注（岩波書店）

JOURNAL
OF
CHIKUSHI JOGAKUEN JUNIOR COLLEGE

No. **39**

January **2004**

Contents

1. Demythologizing English Andrew JAMES ... (1)
2. *Miss (ing) Saigon* (1)
Reshaping the Memory of a Lost War
..... Masashi ICHIKI ... (21)
3. Developmental Characteristics of Children with Very-Low-Birth-
Weight at the Age of 3 years ~From the Results of Kyoto
Scale of Psychological Development~
..... Kaoru OZURU ... (47)
4. Synergetics of Classroom Management: The Analysis
of a Female Student's Notes on Being Bullied.
..... Taku KOGANO ... (63)
5. The Writings of Shu-Eki (II) Michihiko NAGAFUCHI ... (三三)
6. A Study of A Poem of a Poor Woman
— A Poem of Allegory — Haruyuki MATSUZAKI ... (一)
-

Published by

CHIKUSHI JOGAKUEN JUNIOR COLLEGE
ISHIZAKA, DAZAIFU-SHI
FUKUOKA-KEN, JAPAN